特集 “輝くOB・OG 第5弾”

これまでに三重大学という学舎（まなびや）で育った卒業生は約70,573名、社会の様々な分野で活躍中です。

お忙しい中、取材にご協力いただきありがとうございました。

運命を受け入れ、未来を切り拓く「Pioneer」！ File.21

ないない尽くしの大学生活

今の三重大は設備も講義も充実していますね。私が人文学部の一期生として入学した当時（昭和58年）は、専任の教員もおらず文献も揃ってはいませんでした。それどころか人文学部の校舎すらなく、野原が広がっている状態でした。ですから自分たちで勉強会を開いたり、講義外にも教員と積極的に議論するなどして、知識の補てんをしていました。与えられた環境は十分ではなかったかもしれませんが、道を切り拓いていく「開拓（Pioneer）精神」は大学時代に磨かれたのかもしれません。

来年は
コミュニティ政策学会
全国大会を伊賀で開催
するよ

▲第27回青山高原つつじクオーターマラソン大会に参加（2014.5.25）

年男に訪れる転機

卒業後は通商産業省（現:経済産業省）に入省し、主に航空機産業を担当していました。しかし、地元の三重県を元気にしたいという思いから、辞表を出して三重県庁に転職。それから24年間、文化政策やバリアフリー、市町村合併、議会改革など、当時前例があまりない職務ばかり経験しました。同僚からは「お前、またそんなとこに配属されたの?」とよく冷やかされました（笑）。しかし任された以上は、結果を出せるよう努めました。実は、県庁に転職したのが24歳、市町村合併を担当したのが36歳、そして今の副市長になったのが48歳と、なぜか年男には大きな転機が訪れています。定めと思ってありのままを受入れ、その時々に最大限の努力をすることが大切ですね。

とにかくアクティブに前向きに

じっとしているのが我慢できない性格なんです。仕事だけ充実していても面白くない。そう思って、プライベートでは、地元の伊賀を中心に様々なまちづくり活動を行ったり、各種学会に参加したりしています。

副市長としての現任期中に、伊賀市の職員の質を高める仕掛けもどんどん作っていきたいと考えています。

伊賀市役所
副市長

辻上 浩司
Tsujikami, Hiroshi

三重県生まれ。1987年人文学部社会科学科（第一期生）を卒業。通産省を経て三重県職員。2013年1月から特別職として伊賀市副市長に就任。

伊賀上野城を後方に望む
（三重県伊賀市「ハイトピア伊賀」）

～学生へのメッセージ～

あたえられたことに必死に
取り組んでみてください。
努力はきっと開花します！

頭で「思考」体で「試行」！至高の授業で子どもを育てる File.22

文武両道のスポーツマン！

子どもの頃から体を動かすことが大好きでした。特にサッカーが大好きで、小学校4年生から大学生まで続けました。じっとしていられない性格で、「自分は普通のサラリーマンにはなれないな」と悟りました。そこで「体を動かす仕事」がしたいと考え、スポーツ科学が有名な大学を目指していました。しかし、三重大学OBだった高校の先生の勧めを受け、三重大学教育学部保健体育コースに入学しました。部活は迷うことなくサッカー部に入部し、副将を務めました。また、「せっかく同じ授業料を払うなら、たくさん授業を取ろう」と奮起し、単位はもちろん、教員免許5つ、図書館司書の資格も取り、充実した学生生活を送りました。睡眠時間は犠牲になりましたが（笑）。

三重大学教育学部附属小学校教諭
（体育）

矢戸 幹也
Yato, Kanya

福井県生まれ。2005年三重大学教育学部卒業、2007年教育学部大学院修士課程修了。四日市市立三重北小学校に5年間勤務し、2013年より現職。

三重大学教育学部附属小学校 体育館にて
（三重県津市）

友だちと
運動を楽しみながら、
頭もフル回転！

子どもたちは遊びの中で
自然に成長していくんだね。
矢戸先生はそんな授業を
目指しているよ！

転機となった恩師との出会い—そして教師へ

目標となる人を見つけるということは、自分のやりたいことが決まるということだと思います。中学生の頃はスポーツトレーナーに憧れていましたが、大学時代の指導教員の山本俊彦教授と岡野昇教授に感化され、大学2年生の頃から小学校の教師を本格的に目指すようになりました。お二人から、人と向き合い学ぶことの大切さに気付かされました。

教師になり驚いたことは、子どもは大人をよく見ているということです。子どもを指導する以前に自分がしっかりしないといけない。絶対に妥協してはダメ。辛いときもありますが、自分が頑張れば頑張るほど、子どもは応えてくれます。とてもやりがいのある仕事です。

～学生へのメッセージ～

失敗を恐れず、たくさん人生経験をしてください。後に活かせたら、失敗ではなく財産になります！

遊びの大切さ、体育の可能性

子どもを取り巻く社会環境の変化に伴い、体育が担う役割も変化します。習い事で遊ぶ時間がない、防犯・不審者等の問題で公園で遊べない、近所付き合いが減り友だちがつくりにくい・・・近年の子どもたちに不足している「遊ぶ時間、空間、仲間」を、体育の授業の中で充実させていきたいと思っています。何かを身につけるためだけに運動するのではなく、運動自体のおもしろさを知ってほしいですね。子どもたち一人ひとりの表情がキラキラ輝く授業を目指します！

世界へ挑むサムライドクター

File. 23

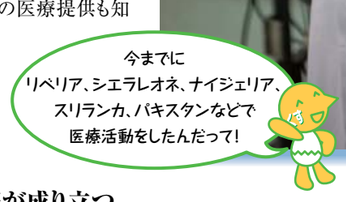
一つの事を一生懸命やり通す

中・高・大学と一貫して剣道部に所属していました。高校総体では愛知県の決勝までいった事もあり、現在も剣道大会のOB戦に呼ばれる事があります。剣道を通して、苦しい事を乗り越えて一つの事を一生懸命やり通す精神を学びました。そのおかげで部活に熱中し過ぎて、あまり勉強はしなかったですね（笑）。一番勉強した時期は研修医として第一外科に入局した時で、大学で部活に費やした時間を取り戻すために頑張りました。

自分を変えるために世界へ

全国指導医講習会の講師として指導医の育成に携わった際、他の講師達の目標に邁進（まいしん）して充実している姿に影響され、「本当に自分がやりたいことは何だろう」と考えるようになりました。そして、今の自分は中学生の時に目指していた医師像と違うことに気づき、それを変えるために医師20年目にして思い切って病院を辞め、国境なき医師団※1に参加しました。去年12月に行ったシリアを含めて8ヵ国に行きましたが、地域によって求められる医療が異なり、専門（消化器外科）外の産婦人科、整形外科などの医療提供も知識と経験を応用することで乗り越えてきました。「国際医療」はあらゆるニーズに対応して成り立つものなのです。

桑名東医療センター救急外来にて（三重県桑名市）



ニーズがあるから医療が成り立つ

日本では、桑名東医療センターで若手医師や研修医に「国際医療」などの教育を行っています。医療の根本は「ニーズがあるから医療が成り立つ」です。若手医師達には自分ができる医療ではなく、広い視野を持って必要とされる医療を行えるようになって欲しいと思っています。広い視野を持ち、他の領域を取り入れて大きなベースを作り、そこへ積み上げていかないと高度な医療は提供できません。これからも若手医師に自信を持って背中を見せられるように色々な事に挑戦していきたいです。

桑名東医療センター
手術室部長、研修管理委員長
久留宮 隆
Kurumiya, Takashi

愛知県生まれ。1984年医学部卒業。1984年附属病院第一外科入局。その後、県内病院などを経て、2004年国境なき医師団外科ミッション参加。2007年～2011年国境なき医師団日本の副会長。海外医療活動を行いながら2009年より桑名東医療センター勤務、現在に至る。

※1 中立・独立・公平な立場で医療・人道援助活動を行う民間・非営利の国際団体

※2 NPO法人MMC（MIE medical complex）卒後臨床研修センター…より良き医師を三重県内で育てて、定着してもらう活動をしている組織

～学生へのメッセージ～

地道に努力すれば「夢」はいつか必ず叶います。諦めるから叶わないのです。

開かれた視界が宇宙を拓く

File. 24

衛星開発を支える仕事

現在携っているのはX線天文衛星「ASTRO-H（アストロ エイチ）」の打ち上げプロジェクトです。科学衛星としてはかなり大きいもので、2015年度に種子島での打ち上げを予定しています。私の専門は電源系になるのですが、このプロジェクトでは、主に信頼性、安全性、品質保証の観点から、設計、製造、最終試験のそれぞれの段階での開発管理を行っています。この「ASTRO-H」をいかに高品質、高信頼性に仕上げるかが一番の目標ですね。

最高水準の科学衛星を

開発管理という仕事は、疎かにするとプロジェクトが失敗するだけでなく、墜落による2次災害を及ぼしかねません。「これでいいんじゃない?」というような妥協は絶対に許されません。性能検証を行う際には、最終的に大型真空槽を使って擬似宇宙空間を作り、かつ高温から極低温まで、限りなく宇宙に近い状況を再現して行います。これをクリアしてようやく打ち上げ可能と認めることができます。

可能性は限りなく

私はいつも、物事を決め付けてかかることの無いように心がけています。今の職務がまさにそうで、“安全なように見えて危ない部分”を見つけることが重要なのですが、「これで大丈夫」と満足してしまえばそれ以上の品質は求められません。それは人間関係も同じです。とても立派に見える人がそうでもなかったり、だめに見える人にもいいところがあったり。ある考えに凝り固まってしまうと、視界が狭まり本質が見えなくなってしまう。それは様々に可能性を狭めることになると思います。

何かに取り組むときにも何かを目指すときにも、先入観には囚われないように。答えはひとつだとしても、アプローチの方法は決してひとつではありませんよ。

JAXA宇宙科学研究所
ASTRO-Hプロジェクトチーム主任開発員
岡崎 健
Okazaki, Tsuyoshi

鳥取県生まれ。1973年工学部電気工学科卒業（工学部1期生）。卒業後、NECに入社し、人工衛星のシステム開発や信頼性管理などに携わる。その後、2011年にJAXA（宇宙航空研究開発機構）に入社し現職。

JAXA宇宙科学研究所 M-3SⅡロケット原寸模型前にて（神奈川県相模原市）

～学生へのメッセージ～

視野を広く、時には自分を離れて「これでいいのか？」と客観的に見つめ直すことも重要です。

自然と人をつなぐ行政マン

File. 25

農林水産省農村振興局整備部農地資源課
課長補佐

土屋 恒久
Tsuchiya, Tsunehisa

三重県生まれ。1995年生物資源学部を卒業し、農林水産省入省。環境省自然環境局、九州農政局、新潟県農地部農村環境課を経て2012年4月から現職。

農林水産省にて
（東京都千代田区霞が関）

霞が関、実は体育会系！

自然環境の保全に関する仕事で、日本全国を回ります。新潟ではトキの野生復帰事業で棚田の保全事業に携わり、環境省に出向して初代里地里山保全専門官として水田、河川やため池など身近な自然環境の保全・再生に関わり、現在は諫早湾干拓事業の環境アセスメントを担当しています。農林水産省と言うと固いイメージで見られますが、職場の雰囲気は体育会系。採用面接では体力に自信があるか聞かれました（笑）。入省した頃と変わらず今でも会議の資料準備等で庁内を走り回ったり、終電に間に合わなくなって職場に泊まったり、体力勝負な仕事です。でも、仲間意識が強く、楽しく仕事をしています。農林水産省には意外と三重大農業土木卒業生が多いんですよ。

経験と絆

学生時代はよく遊びました。勉強より遊んだことをよく覚えています。部活や学祭、当時あったみこし行進に参加し、先輩や後輩とのつきあい方を身に着けました。これらの経験が、今とても役に立っています。

また、狭い業界なので、仕事上で大学時代の恩師に会う機会もあります。社会に出ると、こういう絆が役に立つことが実に多いと思います。

キーワードはコミュニケーション力と忍耐力！

自然環境の保全は、そこに住んでいる人々に納得してもらえないと持続しません。地元に通って、農業、林業、漁業など職業も年齢も様々な方と話をします。何度もお宅を訪問し、世間話から始めて、時間をかけてコミュニケーションを図りました。いろいろな場所での多くの方との出会いが、私自身の人生勉強になっています。

自然は、様々な人に影響を与え、人との絆で成り立っています。自然環境に関する事業は、1、2年で結果が出るものではなく、時間がかかります。その分やりがいは大きく、減農薬、無農薬農業を実施し、生物が帰ってきたと聞いた時は嬉しかったですね。これからも農村環境を守る取り組みに関わっていきたいと思っています。

～学生へのメッセージ～

学生時代は、いろいろな経験を重ねて多くの人との出会いを大切にしてほしい。社会に出た際に、きっと役立ちます。

サステイナブルな地域社会を

File. 26

株式会社サイネックス
代表取締役社長

村田 吉優
Murata, Yoshimasa

三重県生まれ。1976年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。1976年自由民主党本部事務局に就職。1978年商工印刷工業㈱（現:㈱サイネックス）入社。1997年同社代表取締役社長に就任し現在に至る。2014年三重大学大学院地域イノベーション学研究科（博士後期課程）地域イノベーション学専攻修了。

地域再生なくして日本の再生はない！

弊社の事業は、「地域への貢献」という創業以来の精神に基づいており、地域へのこだわりと情熱はどの企業にも負けないと思います。しかし、東京一極集中が進み、東京は繁栄しているが、地方はシャッター街に象徴されるように疲弊しています。これでは健全な国家とは言えません。地域再生なくして日本の再生はないと考えます。

産学官連携について

地方を活性化させるには、各地域が自立し、地域間で特徴を出し合って競争していかなければなりません。ただし、財政難の国に頼っていても何もできません。地域が自主自立で、自力で取り組まなければなりません。そのために、それぞれの能力を発揮することで相乗効果を得られる産学官連携の手法は、地域再生に不可欠であり、日本再生の突破口になるものと信じます。

三重大学の地域貢献を重要視する姿勢は、弊社の発想と一致しています。今後も協力して地域貢献を推進していきたいと思います。

共助精神による“相反両立”

弊社は、創業以来地域の情報メディアを手掛けてきました。中でも、行政情報誌『わが街事典』事業では、広告事業化により自治体に財政負担をかけず、編集・出版も弊社のノウハウを活用するというビジネスモデルを構築しました。社会貢献とビジネスは、二律背反の関係にあります。弊社の事業は、共助精神によって相反するものを両立させる仕組みが組み込まれております。こうした事業モデルを社会全体が共有するようになれば、大きく社会を変革できます。それはこの国の新たな成長につながると思います。

～学生へのメッセージ～

良い意味で尖った人になってほしい。社会を変革させるイノベーションを起こせ！

株式会社サイネックス本社にて
（大阪府大阪市中央区）